

## 2 透析導入後の体調不良、透析拒否、不規則透析を乗り越えたケースを通して

市立岡谷病院 血液透析センター

○木原 彰弘 飯沼 紀恵 名取 忠幸

### I. はじめに

透析患者は導入時に、透析について理解することが出来ても透析を受け入れることは困難とされている。また透析を導入後は厳格な自己管理が必要であり、身体的、精神的、社会的な負担は大きい。

今回、導入時は受け入れも良く心配がないように見られたが、透析を始めてしばらくして受け入れが困難になり、透析拒否や不規則透析を繰り返した患者の看護を通して、安心して透析を受容できるまでの関わりを紹介する。

#### 患者紹介

氏名:S氏 年齢・性別:44才 男性

診断名:糖尿病性腎症

職業:居酒屋自営(母親と2人で経営)

#### 既往歴および現病歴

27才糖尿病

平成16年血糖値上昇

平成17年12月全身浮腫、倦怠感出現

平成18年2月シャント作成、経過観察となる。

5月初めより全身倦怠感、出血傾向、呼吸困難の症状出現5月9日透析導入となる。

5月23日より当院にて透析開始

眼:右 元々弱視

左 硝子体 眼底出血 糖尿病性網膜症

### II. 倫理的配慮

患者に対して趣旨を説明し、今回の発表について了承を得た。

### III. 看護の実際

[看護目標]

透析を受け入れ、安定した透析生活を送ることができる。

#1、透析治療を受け入れることが出来ない

[看護計画]

- 1、スタッフ間でカンファレンスを持ち統一した言動の実践
- 2、患者の訴えを傾聴する
- 3、患者が話しやすい環境作りを行う

### IV. 結果

導入1ヶ月目:5月

[S氏の言動]

透析導入は当分先ですと言われていたけど、突然透析導入になってしまって気持ちの準備は足りません、でも始める以上は頑張ります。透析導入に対して不安が強く、透析に対しての質問が多数あり。

[スタッフ]

突然の導入に対して自己をどうコントロールしてよいのか模索している姿に対して、S氏の気持ちを受け止めることに専念した。また、本人の不安を解消するために質問には丁寧に答えるよう心がけた。

導入2ヶ月目:6月

[S氏の言動]

透析導入後は毒素や水分が取れてとても体が楽になりました。透析導入は突然だったけどこれだけ体が楽になると思わなかったです。

導入3ヶ月目:7月

[S氏の言動]

体調が悪い、何もする気がしない。目も見えにくく、とてもイライラする。

・別冊請求先:木原彰弘 〒394-8512

岡谷市本町4-11-33 市立岡谷病院透析センター

[スタッフ]

透析効率がやや悪く、3時間透析から時間を延ばし4時間透析の指示を伝えた。

[S氏の言動]

とんでもない4時間は出来ない、もうこんな病院に来るのはいやだ。時間の調整がつかないようなら他の病院を考えてほしい。

[スタッフ]

S氏の言動をふまえ、透析条件の再検討を行い3.5時間透析で経過をみることとなった。

**導入4ヶ月目:8月**

[S氏の言動]

実は透析導入後は体の調子がとてもよく、このまま透析をしなくていいんじゃないかと思ってしまい、心の葛藤がとても強かった。毎日そんなことばかりを考えていたので具合が悪くなってしまった。精神的な影響がとても大きかった。

[スタッフ]

体調が良く経過が良好に思っていたので内に秘めた思いに気づけなかった。透析導入後の複雑な心理状態に対してのアプローチの難しさを感じ、考えさせられた言葉だった。

**導入5ヶ月目:9月**

このとき岡谷市においては豪雨災害により甚大な被害を被りました。

[S氏の言動]

お客が来ない、宴席もありません、それに障害年金も受理されず毎日大変です。でもみんな大変だから自分も頑張らないといけなない。

[スタッフ]

社会的困難は具体的なサポートが難しく、傾聴し受け止めることを心掛けた。

**9月7日**

[S氏の言動]

突然S氏が来院し、スタッフの皆さんには感謝しています。と言って差し入れを届けにくる。その日は透析予定日だったが来院せず。連絡も取れなくなった。

[スタッフ]

先生とカンファレンスを持ち、いつでも透析ができるよう体制をとる、という統一した方針を決めた。

**9月8日**

[S氏の言動]

いま遠くにいます。体は大丈夫ですと連絡あり。

[スタッフ]

来院することを強制せず、いつでもいいので帰ってきてくださいと伝える。

来院した時にベッド間隔をあげ患者が話しやすい環境を作り準備した。

**9月9日**

[S氏の言動]

来院される。体は大丈夫です、本当は死のうと思っていたがたまたま止めた駐車場で偶然もう1台駐車していた方と自然と話し出し悩みを打ち明けあい、一晩中車の中で考えやっとなげることが出来ました。もう大丈夫です。

[スタッフ]

何かふっきれた感があり、あまり多くは語らなかつたが、本人が話し出すときには傾聴し、経過を見守った。

**導入6ヶ月目:10月**

[S氏の言動]

体調は戻ってきたけれど、毎回足がつるし、仕事が忙しく透析に来るのがつらいです。

[スタッフ]

安静な透析に心がけ少しでも負担にならないよう心掛けた。

**導入8ヶ月目:12月**

**12月5日**

[S氏の言動]

透析予定日だったが来院せず、連絡取れず

**12月7日**

[S氏の言動]

来院される。とにかく忙しい、体がいくつあっても足りない

[スタッフ]

透析時間はS氏の都合をなるべく配慮した。しかし透析の準備を行ってから直前に予定変更の連絡が続いたため、S氏と話し合いを持ち約束事を決めた。

**導入9ヶ月目:1月**

[S氏の言動]

仕事も一段落して、体調もよく身体的にも精神的にもいい状態になりました。山あり谷ありで小説のような一年だったけどやっとなげ着きました。これからも頑張ります。との言葉があり、笑顔もみられた。

## V. 考察

透析導入時は、身体的なフォローもさることながら、精神的な面でも無我夢中の状態であり、患者の様々な問題に対して、サポートが求められる。今回の症例では導入後不安が強かったものの導入することによって体調がとともよくなり、一見、透析を受け入れてきたと感じていたが、実際は心の内面は気持ちの葛藤があり身体的側面に大きく影響していた。表裏一体の精神状態を理解する難しさを感じ、患者の自己の思いに対してのアプローチをどのようにしていくか考えさせられた。また物静かな患者ほど内にひめてしまう傾向にあるので、自己表現するしないにかかわらず、声掛けていくことが精神的なフォローにつながっていくと思われた。

今年の1月にS氏は9月の透析拒否をした時の事を「あのときにどことこの透析センターに行きなさいとかすぐ戻って来てください、と押し付けるような言動だったら受け入れられなかった、いつでもいいので戻ってきてくださいと言われたことがとても救われた。そしてスタッフが傍でじっくり話を聞いてくれた事で安心できた」との言葉があった。

患者のベッド間隔をあげ患者の話をじっくり聞くことで不安の表出につながったと思われた。患者に不安を与えないようスタッフ間で統一した言動でチームで取り組むことが大切と考える。

2月には「普通の人とはたとえば風邪をひけば治るでも僕たちは一生透析続けなくてはいけない、病院のシステムがどうのこうのより、先生やスタッフの人たちがどれだけ愛情を持ってくれているかがとても大切だと思う」との言葉があった。この言葉はとても重く感じられた。

患者の悩みを完全に消去出来なくとも、患者の奥に潜んでいる精神的支援を求める心理に呼応し患者を支えていくことが大切であり、傾聴するよう心がけ、気長にコミュニケーションをとることにより信頼関係を築けることが出来たと考える。

## IV. おわりに

春木は一生透析を続ける患者に対して分かち合う気持ちが大切であると述べている。

日頃から我々は患者のためとと思っている焦燥感を持つ事があるが、一生精神的、身体的、社会的困難と向き合っていかなければならない透析患者の気持ちを理解しなければならない、そのために傾聴・共感し愛情を持って接することで患者が安心して透析を受けることが出来ると思える。

## VII. 引用・参考文献

春木氏纂一:透析患者の心とケア(続編)  
サイネフロロジーの経験から、1999、51-58  
メディカ出版、大阪